

稲作の起源と縄文農耕論

理事研究員 清水徹朗

1 日本の稲作の起源を巡る論争

米は古くから日本人の生命と生活を支え、稲作、米は神社や様々な祭(新嘗祭、大嘗祭、田植祭等)に見られるように信仰の対象にもなり、日本は「豊葦原瑞穂国」(『日本書紀』)と呼ばれた。今日でも米は日本にとって最も重要な食料であるが、その稲作が日本でいつからどう始まったのかについてこれまで多くの論争が行われてきた。

日本には稲の野生種がないため稲作は他の地域から伝わったと考えられており、その伝播の経路として、①北方説(朝鮮半島経由)、②南方説(南島経由、黒潮ルート)、③直接渡來說(中国大陸から直接)、の3つが唱えられた。また、その渡来時期は紀元前5～4世紀とされ、稲作の渡来とともに弥生時代が始まったとされた。

しかし、国立歴史民俗博物館の研究グループは、炭素14年代法によって土器付着物を測定して、日本で稲作が開始されたのはこれまでの定説より5百年さかのぼり紀元前10世紀であると発表し(2003年)、その後、「縄文時代」「弥生時代」に関する論議が盛んになっている(藤尾慎一郎『<新>弥生時代：500年早かった水田稲作』(2011)、山田康弘『つくられた縄文時代』(2015)、寺前直人『文明に抗した弥生の人びと』(2017))。

2 「照葉樹林文化論」と稲作アッサム・雲南起源説の盛衰

戦後の日本では、戦時中の非科学的な神話的歴史観から解放され、騎馬民族国家説(江上波夫)が提起され邪馬台国論争が盛んになるな

ど古代史ブームが起きた。稲作に関して、安藤広太郎、柳田国男らによって「稲作史研究会」が組織され、稲作の起源や赤米(古代米)等について様々な観点から論じられた(『稲の日本史』)。

また、京都大学の研究者を中心に「照葉樹林文化論」が唱えられ(中尾佐助、上山春平等)、これを受けて、渡部忠世は稲作の起源はアッサム・雲南地域であると主張し(『稲の道』1977)、雲南省や東南アジアの少数民族の食文化や宗教に関する調査・研究が行われた。

しかし、中国長江下流域で1万年前の稲作遺跡(河姆渡遺跡等)が発見され、その一方で雲南省からはそれほど古い遺跡がみつからないため、アッサム・雲南起源説は説得力を失い、現在では稲作は長江下流域で始まったという説が有力になっている。

3 稲作の伝来と縄文農耕論

長江下流域が世界の稲作の起源だとすると、それがいつどのように日本に伝わったのかが問題になる。近年の考古学研究によると、稲作は山東半島や朝鮮半島に紀元前25～20世紀に伝わったことが明らかになっている(宮本一夫『農耕の起源を探る』(2009))。かつては、そこから日本に稲作が伝わったのは紀元前5～4世紀であり、日本での農耕の開始も稲作の渡来と同時期であったとし、それ以前の縄文時代は狩猟・採集・漁労の時代であったとされてきた。

しかし、縄文晩期にも稲作が行われていたことを示す遺跡がみつきり、また稲作が伝わ

る以前にもイモ、豆、雑穀などの栽培(農耕)が行われていたとの主張が行われた(藤森栄一『縄文農耕』(1970)、佐々木高明『稲作以前』(1971)、小畑弘己『タネをまく縄文人』(2015))。さらに、稲作の伝来が5百年さかのぼるとすると、「縄文時代」そのものも根本的に見直す必要が出てくる。また、稲作が北九州に伝わったのが紀元前10世紀としても、すぐに日本列島全体に伝播したのではなく、関東地方で稲作が開始されたのは紀元前3世紀頃で、それまでの数百年間は日本列島の中で稲作を行っていた地域、イモや豆、雑穀を栽培していた地域、狩猟・採集・漁労が中心であった地域が併存していたことになる。

4 日本語の起源と稲作の関係

日本人や稲作の起源と深く関係する問題として「日本語の起源」の問題がある。稲作の起源が長江下流域でそこから日本に伝わったとするならば、その稲作を伝えた人々がおり、その人たちが話していた言語が日本にも伝わったはずである。

しかし、日本は中国から文字(漢字)や思想・文化を多く吸収したものの、日本語と中国語は全く異なる言語である。かつては、日本語は「ウラル・アルタイ語族」とされ朝鮮語、モンゴル語や中央アジアの言語と共通とされたが、両者は文法は似ているものの基本単語(体の部位、基本動詞等)が異なっており、日本語という特異な言語がどう形成されたのかについては未だに結論が出ていない。

この問題に生涯をささげた大野晋(1919~2008)は、1980年頃から南インドのタミル語(ドラヴィダ語族)に注目し、日本語の起源はタミル語であると主張した(『日本語とタミル語』1981)。私はこの大野説に強い関心を抱きタミル語を1年間勉強してみたが、確かにタミル

語の文法は日本語とほとんど同じであり(膠着語)、特に「てにをは」の使い方が全く一致するのに驚いた。

大野は、タミル語が日本語の起源である証拠の一つとして稲作に関する単語(畦^{あぜ}、畝^{うね}、田んぼ、稲等)が共通であることを挙げ、タミル語が日本に到来したのは稲作の伝来と同時期であるとした。また、南インドの最大の祭ポンガル(1月15日頃)で行われる行事が日本の小正月と酷似しており(どんと焼き、注連縄^{しめなわ}、カラス勧請等)、特に日本の小正月で小豆粥を食べるようにポンガルでも甘い粥を赤米で作ることを紹介している(『日本語の起源 新版』1994)。なお、柳田国男は、日本でお祝いの時に赤飯を炊くのは古代の日本人が赤米を信奉していた名残であると指摘している。

タミル語が南インドから日本にたどりついた経路は解明されていないが、南インドとマレー半島の間には海を通じた交易がありマレーシアにはタミル人がいること、フィリピン人はマレー系であり、フィリピンのすぐ北に台湾(原住民は南方系)があり、台湾と沖縄は非常に近いということを考えると、海を伝わって南インドの言語、文化が日本まで到達したとしても不思議ではない。大野は、南インドと古代日本の共通点として巨石文化、支石墓、甕棺、文字以前の記号(Graffiti)を挙げている(『弥生文明と南インド』2004)。

私は大野説を説得力があり否定することはできないと考えているが、稲作の起源が長江下流域であることとタミル語と日本語に共通の稲作用語があることとの関係は謎である。この問題は日本の文化や日本人を考えるうえで非常に重要であり、今後、稲作と日本語の起源に関してさらなる探求と解明が行われることを期待したい。

(しみず てつろう)